英国留学事情（大須賀英郎）

2025年2月9日　湘現会

1　私自身の留学

1981年－82年　ロンドン大学ユニバーシティカレッジ(UCL)大学院
1982年－83年　ロンドン大学UCLとインペリアルカレッジの共同講座
経済学、交通学研究。1年半ほど大学の寮、のち賃貸フラット
サッチャー政権(79－90年)の初期。実験的に業界に規制緩和を導入

イギリス経済の凋落と日本の最盛期、チャールズ・ダイアナご成婚

フォークランド戦争、徳仁親王殿下のご留学直前

2　イギリスの大学数は110校程度でデフレ傾向。
古代大学(12－13世紀のオックスフォードとケンブリッジ)、近世大学(18世紀以降のロンドン大学ほか9校)、新設大学(1960年代以降)
世界大学ランキングでは、上位に入る。

3　私自身の大学院生活
1年目:イギリス人の多いコース。冷たい感じ。授業と最終の試験のみ
2年目:留学生の多いコース。授業、小論文、試験、論文、個人指導
留学の成果:急行バスの規制緩和(1980年運輸法の影響)について分析
帰国後、専門誌に発表　日経「やさしい経済学」:辛い留学生生活

4　長州ファイブの留学(1863年から5年間)
井上馨(外務卿)伊藤博文(内閣総理大臣)遠藤謹助(造幣局長)
山尾庸三(工部卿)井上勝(鉄道庁長官)の5名の長州藩士
UCL(1826年に創設)などに留学　帰国後日本の建設のために貢献　外国人留学生の先駆
UCL教授宅などに下宿

5　夏目漱石の留学(1900－02年)
文部省派遣第1回留学生(希望したわけではない)ロンドン大学聴講生
中世英語のケア先生の授業　シェークスピア研究家クレイグ先生の個人教授　5軒の下宿を転々　物価高と金の無さに苦しむ　気候の不順

「同じ英国へ来たくらいなら今少し学問のある話せる人の家におって、汚い狭いは苦にならないから、どうか朝夕交際がして見たい」

「自分の望みの通りの人で下宿人を置く処があるかそれがすこぶる疑わしい。広い世界にはあるだろう。けれどもそれに逢着するのは難中の難事である」

「あらゆる節倹をしてかようなわびしい住居をしているのはね、一つは自分が日本におった時の自分ではない単に学生であるという感じが強いのと、二つ目にはせっかく西洋へ来たものだから成る事なら一冊でも余計専門上の書物を買って帰りたい欲があるからさ」(倫敦消息)

「冬の夜のヒューヒュー風が吹く時にストーヴから煙りが逆戻りして室の中が真黒に一面に燻るときや、窓と戸の障子の隙間から寒い風が遠慮なく這込んで股から腰のあたりがたまらなく冷たい時や・・・自分がだんだん下落するような情けない心地のする時は、何のためにこんな切りつめた生活をするんだろうと思うこともある」

「3 階に籠もって，全身全霊を打ち込んで,『文学論』(文学の社会的必要性)の新しい研究に費やした」

6 彬子様のご留学(最初の留学 2001－02 年)
オックスフォード大学マートンコレッジの聴講生(学部 1 年生扱い) 当初、語学で苦労

「会話に全くついていけていない。どんどん孤立していき、1 年生のオリエンテーリングのイベントのあと、ひとり部屋に戻ると、ドアを閉めた瞬間に涙がこぼれた。3 年生のブロックに住んでいたので、3 年生の中心的存在であったベネディクトという男子学生が、お茶に誘ってくれ、友達の輪の中に入れてくれた。その後もパブや映画や誕生会など、ことあるごとに声をかけてくれた。徐々に学生生活になじめるように。英語も突然分かるようになった。」

「護衛官の付かない生活(EU 圏内で 2 週間以上の滞在では護衛は付かない「いつも側衛がいた。生まれて初めて一人で街を歩いたのは日本ではなくオックスフォードだった」

「オックスフォードの中には、40 近くのコレッジ(学寮)がある。各コレッジは、独自の予算で運営し、キャンパスも寮の充実度も学力レベルも全て違う。オックスフォード大学というのは、都内の大学を全てひっくるめて「東京大学」というようなもの。」

「授業の形態も、所属コレッジに関係なく専攻生が集まる「レクチャー」、コレッジで行われる 10 人程度の「セミナー」、先生と学生が1対数人で個人指導される「チュートリアル」1 週間に 1 本(これを中心に生活が回る、とにかく勉強をするだけで精一杯)、毎学期 8 本のエッセイを書い

た。エリッサの提案で、同級生ルイーズとエリッサとで、お互いのエッセイを交換して勉強(二人の心遣い)」

「食堂の奥にはハイ・テーブルと呼ばれる場所がある。食堂のいちばん奥、学生の席より一段高い場所に二十人ほどが座れる格調高いダイニング・テーブルが置かれている。高い天井に壁中に飾られた歴代学長の肖像画。けっして座り心地がよいとはいえない硬い木のベンチに間接照明。まさに「ハリーポッター」に出てくる食堂そのもの」

「時間になると、奥の扉からガウンを着た学長以下、先生方がぞろぞろと入場し、テーブルの周りに立つ。机に備え付けられている木槌を学長がドンドンと2回叩くと、全員が起立。その日出席しているなかで一番の優等生が進み出て、ラテン語でお祈りを述べる。お祈りの最後、学長が「アーメン」といったら、着席して食事が始まる。前菜、メインのあとにデザートという流れである」

(2度目のご留学　修士・博士　2004－09 年)
研究テーマ(なぜ英国で日本美術を学ぶことにしたか)「19世紀末から20世紀にかけて、西洋人が日本美術をどのようにみていたかを、大英博物館所蔵の日本美術コレクション(3万点ある)を中心に明らかにする」

(ジェシカ学長のチュートリアル)「とにかく忙しい人なので、彼女の時間を無駄にすることは許されない。『前回のチュートリアルから何も進んでいない』なんてことはあってはならない」「彼女の頭の中にはものすごい量の知識とアイディアが詰まっている。そして、自分ができることは他人もできると思っている」
→アドバイスを取捨選択するようになってから少しだけ気持ちが楽になった。「ジェシカの旅行」の前に指名されて彼女が旅行中に読む論文を提出する学生は部屋に引きこもってひたすら論文を書く。

「いつも一進一退を繰り返し、一日中パソコンの前に座って書けたのはたった五行、なんて日もある。だから、『元気？』と聞かれても元気なわけはないし、『調子はどう？』と聞かれても基本的に調子はいまいち。こうして、論文書きに集中せざるをえない私の中の暗闇は広がり、世界でたった一人、時間の狭間に取り残された悲劇の主人公になってしまったように感じるのである」→数ヶ月に一度の割でストレス(博士論文)性胃炎になる→サンドイッチ屋にパソコンを持ち込み 2 時間集中して作業。」

「一言でいえば、「とにかく大変で辛かった」留学最後の 1 年間。でも不思議と「もうやめたい」とは一度も思わなかった。それはきっと私が、沢山の人たちの愛情と応援に支えられていたからに違いないのである」

7 徳仁親王(当時)のご留学(聴講生, マートンコレッジ 1983-85年)
指導教授ピーター・マサイス博士(「最初の工業国家」著者)

最初の公的行事:6月21日の到着より10日間, 平原大使公邸で過ごす. 翌日, 英国議会開会式見学, 伝統の国イギリスを実感. 翌日はアレクサンドラ王女からセントジェームス宮殿にご招待,その翌日はエリザベス女王からティーにご招待. さらにアン王女の別邸にご招待. 学長と指導教授に会う. 3ヶ月間女王側近のトム・ホール大佐邸でホームステイ・語学研修. 数日のスコットランド旅行, エジンバラ国際フェスティバルを見学.

最初の学期:日本の交通史の概略をまとめる(古代～江戸)
「なぜ日本では馬車が発達しなかったか?」という質問
マサイアス先生の授業(英国近代経済史、格調高い)などにも出席(許可を得てテープレコーダーを持ち込み, 自室で講義の内容を復習)先生同伴のもと市の文書館で資料の探索, 箱一杯の資料が見つかる. オックスフォードの図書館で, 裁判所の記録や, 地方紙を調査(最初の年)

チュートリアルでは, エッセイの提出時には批評を得る. 研究の進捗状況や質問点を整理してコメントを得る→わかりやすい問題点の指摘や文献の紹介(very good と褒めてくれる)

2年目にマサイアス先生の弟子のモーガン先生がブリストルから指導に来る.
オックスフォード州以外の州の文書館での調査(モーガン先生同行)ロンドンはキューの国立公文書館, ギルドホールの図書館にも行った. 行く度に何か新しい情報を得る.

ハイフィールド先生は, 毎週1回, 自室に訪問され, 勉強の進捗状況を話し, その後, オックスフォードの歴史的建造物を見る散歩にでかけた. マサイアス先生に提出する論文について, ハイフィールド先生の部屋を訪れ, 指導を受ける.
論文の作成と出版→*The Thames as Highway (Oxford Univ. press)*

8 まとめ

私の留学(1年目) 苦しいだけ, 劣悪な環境, 成果無し ×
私の留学(2年目) 国際的なクラス,教授陣との交流, 学位取得 ○
長州ファイブ ラッキーな受入体制, 日本の礎を築く ○
夏目漱石 成り行き任せ,引越,孤独と蟄居, 学問的・文学的成果 ×
彬子様 とにかく辛かった, 沢山の人の支え, 博士号取得 ○
徳仁親王 完璧に準備された留学, 多岐にわたる多くの成果 ○